

子ども向け造形ワークショップ実施における学生の育ち

香月 欣浩

四條畷学園短期大学

The growth of students in the children's modeling workshops

Yoshihiro Katsuki

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第49号 別刷

平成28年5月31日

子ども向け造形ワークショップ実施における学生の育ち

香月 欣浩 *

The growth of students in the children's modeling workshops

Yoshihiro Katsuki

近年、保育者を目指す学生の意欲の低下が大変気になっていた。その原因は、様々なものがあると思うが、そのひとつに学校内の授業（講義）と実践（実習）における時間数のアンバランスにあると考える。入学時の学生は将来の夢を実現しようと意欲もあり、積極的な姿勢である。しかし早朝から夕方遅くまでである90分授業、提出物、試験などを経験していくうちに、疲弊し、意欲が低下しているように感じる。しかし実習に行き、子どもと関わり、現場の保育者の立ち居振る舞いに触れることで、「保育者になるために自分が身に付けねばならないこと」を学び、意欲を得て帰ってくるようだ。つまり実践を通して学ぶ経験を増やすことが、学生の意欲や学びの効果が増すのではないかと考える。

本研究では、学生たちが子ども向け造形ワークショップを計画、準備、実施したゼミナールでの活動を取り上げ、その中で学生たちにどのような変化があったのかを明らかにする。

Key words: 主体性・ワークショップ・こどもの発想力・社会性

I. はじめに

I-1. ワークショップについて

ワークショップという言葉は、イベントや研修、教室などでもよく見かける言葉である。あまりに見かけすぎて実際のところなにをワークショップというのかが分からなくなる程である。はじめに本論でのワークショップの定義をしておく。

「第1のワークショップ」... ワークショップを作業場や工房の意味で使用する用法はいまでもイギリスやアメリカでつづいており、都市を歩くとワークショップという看板を見かけることがすくなくない。町の小さな工場、修理店などである。有名なところでは、日本でも放送されたアメリカの長寿番組「セサミストリート」のアメリカの番組制作会社はチルドレンズ・テレビジョン・ワークショップ Children's Television Workshop といい、のちにセサミ・ワークショップ Sesame Workshop と称している。この番組の理念や手法は新しい意味でもワークショップ的なのだが、制作会社の名前は原義の工房としてのワークショップである。こ

のように16世紀から確認できる言葉が、500年近くも生き続けていることとなる。¹⁾

「第2のワークショップ」... 教師のためのワークショップつまり研究集会・講習や、その後に広がる専門家のためのワークショップなどは、直接に技術や知識の習得やそれに基づく資格や免許などが目的である。²⁾

「第3のワークショップ」... 技術や知識の習得や資格に直接には結びつかずそれを目的にしないという特徴をもつ「ワークショップとしか言えないワークショップ」³⁾とし、本論で扱うワークショップはこれである。

I-2. 教育構造の3つの分類

「陶冶」... 教室で教師が生徒に教材を使って教えるという構造であり、近代学校のモデルである。

「教化」... 生徒が媒介に接して学ぶが、教師は存在せずに企画運営する人は背後にいるという、博物館や図書館のモデルである。

「形成」... 人間と人間の関係で学ぶという地域や職場での人間形成のモデルである。

* 四條畷学園短期大学 保育学科

本論では、企画運営する者が後ろに退いて学習者の主体的な試みを促進する「教化」の一つとして、ワークショップを位置づけることにする。

さらに「ワークショップとしか言えないワークショップ」は、過程自体に意義を見出したり、結果として得られるものが参加者によって異なっていたりする。それがどうであっても不合格だと合格は判定されない。⁴⁾ また目的や目標ができて、きちんと計画され準備されたものである。この点は、陶冶に酷似する。しかし、この目的や目標にかかわらず、主体たる参加者が享受すべき過程と結果は自由である。⁵⁾

I - 3. ワークショップの分類

中野はワークショップを次の7つに分類している。⁶⁾

- (1) アート系-演劇、ダンス、美術、音楽、工芸、博物館、自己表現など
- (2) まちづくり系-住民参加のまちづくり、コミュニティづくり、政策づくりなど
- (3) 社会変革系-平和教育、開発教育、国際理解教育など
- (4) 自然・環境系-環境教育・野外教育・自然体験教育など
- (5) 教育・学習系-学校教育・社会教育・企業研修・国際会議など
- (6) 精神世界系-自己成長・自己変容・こころとからだ・人間関係
- (7) 統合系-精神世界と社会変革の統合・個人と社会の癒しと変革など

本論で行なうワークショップは(1)アート系である。演劇にしろダンスにしろ音楽にしろ、アートに関しては、観客として楽しむだけではおさまらず、「やってみよう」という人たちがいる。そういう人が自ら身体を使って実際に習ったり学んだりする場合は、常に体験的な場であり、自ら積極的に参加しないと始まらない。

II. 問題提起

II - 1. 学生の現状

本学の学生は、将来の保育者を目指すために入学してきた者、子どものことが大好きな者が大半

である。しかし保育者という明確な目標があるにもかかわらず、積極的な意欲を全員が持ち、学生生活を送っているとは感じられない。今なにを具体的にやるべきか、意識をどのように持って日々を暮していくべきか分からず、入学当時の志は薄れて行っているようだ。その原因のひとつは意欲の減退にあると思われる。学生に限らず大人でも目標が大きすぎたり、時間がありすぎると、イメージが湧かず本気になりにくいものだ。学生にとって2年後、保育者になっている自分を想像して今を頑張ることは非常に難しいことではないだろうか。そういった意味で学生たちにとって具体的な目標となり有効なのが「実習」である。講義で教わる保育の世界だけではイメージが湧かず実感は得られにくい、実習先には子どもがおり、自分の関わりがすぐに子どもの反応となって返ってくる。これで意欲が増さないはずはない。つまり自ら関わっていくことのできるものならば学生は意欲を持つことができると考えられる。

II - 2. 学生に足りないもの

学校へ学びに来ているわけであるから、足りないものがたくさんあっても構わないが、就職する時まで身に付けておいて欲しいことがいくつもある。例えば、自発的に主体性を持って経験しようとする力・協調性・実行力・改善力・軌道修正力・コミュニケーション力・企画力・アドバイス力・記録力などである。その他にも筆記力・計算力・漢字力・記述力・ピアノ技術・歌唱力・表現力などここでは挙げることができない。保育者を目指す学生たちにとって、苦手であっては致命的なスキルである「人との交流力」「人前での発表力」「計画・準備・実行力」を付ける必要がある。これらの力のいくつかを学生たちが意欲的、積極的、主体的に身につけることができる方法はないだろうか。

III - 3. 保育の力を高める経験

「協調性・企画力・記録力」はワークショップを進行していく者(ファシリテーター)にとっては必要な能力だと高橋は述べている。⁷⁾ ここに出てくるファシリテーターはワークショップを企画して、準備して、その実施を後ろから見守る人、裏側から支える人(促進する人)である。決して指導し

たり評価する人ではない。

ファシリテーターはいわば、ワークショップにおける「先導役」であり「調整役」であり、「介入役」であり、「まとめ役」である。⁸⁾ また参加者を後ろから見守り、簡単なアドバイスをしたり、参加者からの相談に乗ったり、万一危ない場合は対応する者のことである。なおファシリテーターについて高橋は、「造形についての修練を積んだ人である。作家やデザイナー、美術教員や美術分野の学芸員がまず考えられる。専門性があるから、企画ができ、そして準備をおこない、そして誰でもが参加できるように促進できるのだ。」⁹⁾ と述べているが、私は保育学科の学生であってもファシリテーターを行なうことは可能だと考える。ただ、高橋の言うように専門について、つまり子どもや造形についての勉強や実習などを通しての経験が必要になることは間違いない。

Ⅲ. 目的

楨は学生が身につけてほしい力と方法について以下のように述べている。「文部科学省では、2007年の中央教育審議会での社会人としての基礎力の育成に関する検討内容が提出されました。それ以降、ジェネリック・スキルの育成が各大学の課題として挙げられました。

ジェネリック・スキルとは、文部科学省中教審大学分科会の「学士過程教育の再構築に向けて」の審議経過報告によると、「多文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化、社会と自然に関する知識の理解、コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力、自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力、総合的な学習経験、創造的思考力等」とされています。これは、社会人基礎力と呼ばれるスキルです。これは大学の学習を円滑に進める上でも必要であり、本学でももちろん必須の課題である。ところがそれを具体的にどうやって身につけていけばいいのかは、各教員が授業内で行なう指導に任せられているところである。」¹⁰⁾

筆者がⅡ-2に述べた「学生に足りないもの」が楨の挙げるジェネリック・スキルの中の要素に多く含まれている。そこで筆者は学生がその力を身

につける方法として「学生たちが子ども向けに行なう造形ワークショップ」に目をつけた。造形表現を研究する学生たちが専門性を生かしたワークショップを計画し、参加者を募集、道具や材料の準備、環境整備を行なう。これによって「学生たちが社会的に意義のある活動として発信する学びを構築すること」¹¹⁾ ができるのではないだろうか。

またゼミナールは少人数制の授業であるため、比較的自由に時間と場所を利用できる。ここでなら子ども向け造形ワークショップが実践できるのではないかと考えたのである。

Ⅳ. 研究の方法

学生たちが主体となって、子ども向け造形ワークショップを企画運営する。その過程で、学生たちの学びや成長はどこにあるのか、ワークショップ後に振り返りのためのミーティングとアンケートを行なった。本研究では、そのアンケートをもとに考察を行なうことにする。

Ⅳ-1. ワークショップの概要

日時：2015年8月5日(水) 10時～12時30分
場所：四條畷学園短期大学 清風学舎3階木工室
内容：「おもしろお面を作ろう」子どもたちにダンボールと廃材を使ったお気に入りのおもしろいお面を作ってもらおう。※ワークショップの内容は「tupera tupera のわくわくワークショップワークショップ」(チャイルド本社)を参考に実行する

目的：ワークショップを計画することで子どもたちの言動、態度、行動を予測し、実施することで実際に子どもたちを観察し考察を行なう。

対象：四條畷学園大学附属幼稚園 年長児 10名

ゼミ学生：9名(ファシリテーター)

見学者：3名(参加した子どもの保護者)

Ⅳ-2. ワークショップまでの流れ

ゼミ15回の授業のうち後半の7回を使って計画、準備を行ない、夏休みの2日を使って直前準備とワークショップを行なった。

9回目：様々なワークショップを知る 6/2

10回目：ワークショップを考える(材料集め、日程、場所、募集年齢、人数、申し込み方法、参加料、参加者募集の範囲、係り) 6/9

内は選択した学生人数。V-2の質問に対しては(すごく良かった・良かった・まあまあ良かった・どちらでもない・良くなかった・まったく良くなかった)から選択してもらい、さらに具体的に記述してもらった。V-3ではワークショップ全体を通しての自由記述をしてもらった。なおアンケートに回答した学生は8名。

V-1. ワークショップの計画・話し合い・準備・実施を通して何を学びましたか。

- 回答の多かった順に選択肢を挙げる。-

- ・「環境設定」「子どもへの対応」(8人)
- ・「他人の意見を聞くこと・理解すること」「仲間との協力」「想像力」(7人)
- ・「見通しを立てること」「臨機応変に対応すること」「安全性」「自分たちで決めること」「計画・準備を行なうことの必要性」(6人)
- ・「数量的なこと」「チラシでの募集方法」「材料のこと」「コミュニケーション力」(5人)
- ・「用具のこと」「用具や材料の知識」(4人)
- ・「言語的なこと」「することを自分で決めること」「用具や材料の技術」(3人)

<考察>

ワークショップを準備していく段階で、子どもの心理や行動を考えながら様々なことを決定していくため、「環境設定」の重要性を感じている学生が多かった。また当日、子どもたちとワークショップを実際に行ない、子どもの想像力の素晴らしさに感心し、「子どもたちへの対応」の難しさややりがいを学生の多くが感じていた。

また学生間では「他人の意見を聞くこと・理解すること」「仲間との協力」を挙げており、難しさというよりもむしろ相互理解し協力しあう事の大切さを感じ、お互いの存在に感謝している様子が見られた。

さらに「見通しを立てること」の重要性も半数の学生が感じている。それは子どもたちの安全性にも関わってくる重要なポイントであり、活動をスムーズに運ぶためにも必要なものである。

V-2. 多くの子どもや大人と関わってみてどうでしたか

すごく良かった(7人)・良かった(1人)・ま

あまあ良かった(0人)・どちらでもない(0人)・良くなかった(0人)・まったく良くなかった(0人)(具体的な記述)

・子ども1人1人の表現の仕方が違い、こんな表現方法もあるのだと知れた。

・最初に親御さんから「おねがいします」ワークショップ後は「ありがとうございました。」と声をかけていただいたのが良かったです。

・優しい親御さんばかりで、話しやすくてコミュニケーションをとるのが楽しかったです。

・子どもたちの中でも色々な子がいましたが、すごい想像力を持っていて、関わられて楽しかったです。

・子どもが予想しなかった行動をとった時などの対応をするのに勉強になったし、保護者が帰りに話しかけて来てくれて、工作している時の子どもの様子を話したりして、よい経験ができたと思います。

・初めて会った子と一緒に工夫してオリジナルのお面を作る経験ができてとても良かった。

・子どもたちも初対面で親御さんとも初対面で、どうなるのかと思っていたのですが、笑顔で積極的に話すと、快く話して下さって全員が全員そうじゃないかもしれないですが、子どもや大人の方に関わられて本当に良かったです。とても良い経験になりました。

<考察>

多くの学生が多くの子どもや大人と関わってみて「すごく良かった」と答えており、具体的な理由として、親御さんとのコミュニケーションをとれたことの満足感があげられる。学生はワークショップが終わり、子どもを迎えに来た親御さんに対して、工作中的子どもの様子を伝え、自ら話すきっかけを作り出していた。昨今の学生はコミュニケーション能力がないと言われるが大人と会話する場面がないだけなのかもしれない。実習中に来園した親御さんと接する場面はあるが、立場としては実習生であり会話まではいかないケースが多い。一方今回は学生がワークショップを主催しているので、親御さんが学生に対して親しみを持って下さり、コミュニケーションがとりやすかったと考えられる。

以上のことから学生たちは子どもに受け入れられ、親御さんからも優しい言葉をかけていただい

た事で自己肯定感が高まったと言えるのではないだろうか。

V-3. 自由記述（感じたこと・思ったこと・意識の変化をできるだけたくさん書いてください）よりいくつか掲載し、記述内容を分析する。

記述の内容で分類してみると以下ようになった。

（ ）内は記述した、延べ人数

立ち居振る舞いについて（0人）・導入・指導・説明について（2人）・言葉かけ（接し方）について（6人）・準備（材料やシミュレーション）について（4人）・子どもの発想や表現力について（13人）・意識・考え方・経験・協力・学びについて（8人）

・材料は多めに用意しておくことを学びました。なぜなら子ども達も材料が多いと材料を見るだけでウキウキして、作ることがもっともっと楽しみになり、発想もとても豊かになり、1人1人個性あふれる作品になるという事に気づいたからです。

・シミュレーションはとても重要。シミュレーションがなかったら本番に緊張してしまって、きっと何も喋れなくなってしまうと思うし、臨機応変に対応できないと思うからです。

・子どものキラキラ輝いた目を見ると私もしっかりと子どもの目線に立って、子どもと一緒に発見して、共感して、楽しめる、そんな先生になりたいと改めて思いました。

・さっきまでおしゃべりだった子が、恥ずかしがって発表できずにいました。最後に私が背中をぼんぼんしてあげながら一緒に発表したら、小さな声でしたが発表することができました。発表後の子どもはとても満足そうで良かったです。

・当日になってこうしたらよかったなと思うことがたくさんありました。

・子どもたちが思っているように動いてくれませんでした。

・ワークショップをみんなで計画から試みて、材料集めや、参加者の募集、進め方など色々なことを決めるのが大変だと思いました。

<考察>

「子どもの発想や表現力について」書いた学生が多かった。これはファシリテーターという立場から子どもたちを極力見守り、傍で観察することによ

って子どもたちの発想や表現力を感じることができたからであると考え。次に、シミュレーションについて、保坂はシミュレーションを「ロールプレイング」として表現し、実習前の授業内で造形の設定保育を学生同士でシミュレーションさせている。「実習前に行なう実習を活かすことができるか」という問いには、ほとんど全員の学生ができると答えており、学習前のロールプレイングが体験者の自覚的効果を実感させることができる教育方法である¹²⁾と述べているように保育実習や就職してからの保育現場の実践で活かすことができると考える。またある程度の予測ができるので緊張せずにファシリテーターを行なえたことが学生の記述からもうかがえる。

さらに学生たちは自分の行為に対し、子どもたちが反応してくれたこと、また子どもたちが満足してくれたことに喜びを感じているようである。中には、子どもたちが夢中になる姿を目の当たりにして改めて保育士になりたいという思いをさらに強く持った学生もいた反面、計画、準備し、実行することの大変さを感じている学生もいた。

VI. まとめ

学生たちはワークショップを企画し、準備することによって、子どもの行動を予測し、よりよい環境設定や進め方、子どもへの対応を学んでいることが明らかになった。同時に仲間との協力の重要性を感じ、相互理解にも努めていた。また保護者との会話の機会も積極的に作り出しており、ワークショップを行なうことによって学生たちは、主体的に活動するようになったと考えられる。

また子どもが夢中になって制作する姿や喜んだ表情を傍で見て、保護者からも感謝の言葉をいただくことで自己肯定感が高くなるとともに達成感と意欲が増していることが分かる。さらにワークショップ後、学生たちが筆者の所へ12月にまた別のワークショップを企画実行したいと申し出てきた。このことから自発的に行動する兆候も見え始めていると考える。

今後も学生主体のワークショップを続け、学生たちの変化をさらに研究していきたいと思う。

引用文献

- 1) 高橋陽一 「造形ワークショップを支える」 武蔵野美術大学出版局 P19～20
- 2) 同上 P26
- 3) 同上 P27
- 4) 高橋陽一 「造形ワークショップの支える」 武蔵野美術大学出版局 P42
- 5) 高橋陽一 「造形ワークショップを支える」 武蔵野美術大学出版局 P43
- 6) 中野民夫 「ワークショップ」～新しい学びと創造の場～ P19
- 7) 高橋陽一 「造形ワークショップを支える」 武蔵野美術大学出版局 P66～67
- 8) 同上 P87
- 9) 高橋陽一 「造形ワークショップを支える」 武蔵野美術大学出版局 P65～66
- 10) 楨英子 「絵本でつくるワークショップ」 萌文書林 P84
- 11) 楨英子 「絵本でつくるワークショップ」 萌文書林 P85
- 12) 保坂 遊 聖和学園短期大学紀要 (46) P19～31
2009年3月

－ 2016. 3.12 受稿、2016. 3.14 受理－